

「レスコヴィッチコレクションの摺物」展によせて——

八陣亭堅城と広重

浮世絵史において、風景画・花鳥画の大成者の一人として知られている歌川広重の版画に最も多く登場する人物が、八陣亭堅城である。ただし、八陣亭のことは、生没年はおろか、俗名も住所も判明していない。確実なのは、広重の友人であったこと、淮南堂眉住率いる狂歌連、「の一」連の判者であったことくらいである。「堅城」は「かたき」の表記例があるので確実であるが、「八陣亭」の読み方は分からない。筆者は最近まで、仮に「やじんでい」と読んでいたが、八陣（はちじん）という陣立てがあることを思えば、「はちじん」と読むべきかもしれない。その狂歌名から推定して武士、それも、ある程度の収入がある江戸住の中上級武士と推定される。

八陣亭の名を見出すことのできる早い例は狂歌集であり、以下にそれを記す。

- 1) 『承久五十首題狂歌集』1冊、文化13年か。淮南堂撰。五清・辰斎の挿図あり。
- 2) 『狂歌紫の巻』1冊、文化15年2月序刊。淮南堂撰。広重画。拙稿「歌川広重の画業」（『広重 摺の極』展図録、2024年）参照。八陣亭の狂歌は12首。
- 3) 『垣下集』1冊、文政期。淮南堂撰。二代岡田玉山の見開き彩色図2図入り。
- 4) 『小夜しぐれ』1冊、文政3年。朱楽菅江二十三回忌追善、節松嫁々追善狂歌集。
- 5) 『文政三年 五撰狂歌集』2冊、文政3年。六樹園撰。千春・北溪・英山などの挿図入り。
- 6) 『はなの枝折』1冊、文政3、4年頃。芬陀利花庵・節松嫁々撰。北溪の挿図が4図。

7) 『狂歌画像太平記』1冊、文政頃。淮南堂撰。国安・広重挿図。

8) 『狂詞秋十題集』1冊、文政頃。淮南堂・東山堂・伊呂波堂・波羅蜜庵・元旦亭・百丈亭撰。「勸進元 桑名松寿連」「差添 八陣亭堅城」と記されているので、桑名の松寿連が企画し、諸々の仲介を八陣亭がしたものの。「梅たつ」「(印)南涯」の挿図2図入り。

9) 『の一月並画賛集』1冊、天保3年(推定)。「歌川広重の画業」参照。

10) 『墨田川余波』1冊。天保4年。淮南堂追善狂歌集。「歌川広重の画業」参照。「もとめに應じて 八陣亭醉書」とある都鳥図が載る。

11) 『職人尽花月集』1冊、天保6年序刊。四方滝水・風月庵眉住撰。竹内眉山画。

ここに挙げた10余の狂歌集は、淮南堂および広重の調査で判明したもので、博搜すればまだまだ増えると推測される。

八陣亭が注文、あるいは制作に関与した摺物は4点確認できるが、そのうちの2点は本展に、1点は「広重」展に出品されている(残りの1点も「広重」展図録に掲載)ので、詳細は、その図録を参照されたい。

八陣亭の狂歌賛が入った錦絵は以下の通りである。

- 1) 狂歌入「東都八景」3種…扇地紙形枠内に風景と狂歌、枠外に氷文、右上に「東都八景」、左上に副題を記した「清水」版の横間四つ切判(狂歌は八陣亭堅城6首、広重1首、蜀山人「大田南畝、故人」1首)、折跡のある扇地紙形枠内に風景と題名、枠外に狂歌を記した川口屋長蔵版の横間四つ切判(狂歌は八陣亭堅城4首、

豊年舎万作3首、月池道人1首)、亀甲形枠内に風景、枠外に尾花を散らし題名・狂歌・署名を入れた小判(狂歌は八陣亭堅城4首、豊年舎万作2首、月池道人2首)。天保2年頃。入れられた狂歌数を考慮すると、これらのシリーズの成立に八陣亭が深く関与したことは明らか。

2) 中短冊判花鳥画…「月に松上の木菟」「藤に四十雀」「雪中の鶏」「竹に雀」「柿に目白」「葛に白頭」…すべて、天保3～6年刊の正栄堂川口屋正蔵版(推定含む)。「竹に雀」の雀の傍らに「十歳 隣女」と署名しているが、この隣女を八陣亭の子か孫と推定することができるかもしれない。

3) 中短冊判「四季江都名所 夏 両国月」。天保3～6年頃。川口屋正蔵版。「四季江都名所」は4枚揃であるが、「夏」以外の賛は、文政10年(1827)刊「江戸名所花暦」(岡山鳥著、長谷川雪旦画)の中からすべて採っているので、八陣亭がその選択にも関与した可能性が高い。

4) 大判3枚続「東都両国船遊之図」。天保6年刊か。佐野屋喜兵衛版。八陣亭堅城の狂歌賛と亀田鵬斎の狂詩賛がある。鵬斎の狂詩賛は、「江戸名所花暦」の「両国橋納涼」図のものを転用したもので、その転用に八陣亭が関与している可能性が高い。

5) 横大判「江戸近郊八景之内 芝浦

晴嵐」天保7～8年頃。狂歌師、大盃堂吞升が企画し版元、佐野屋喜兵衛と協力して制作された8枚揃の一。その1図の初版に八陣亭他計3首の狂歌が入っている。他に、狂歌丁にも1首入っている。詳細は「広重摺の極」展図録を参照。

花鳥画などを見ると、八陣亭は、花押として、「一」「の」を上下に重ねた「可」の草書体のようなものを使用している。それは、「の一」連に属していたことからの着想で、「かたき」の「か」を表しているものと推測できる。また、八陣亭の狂歌は、広重の天保12年の旅日記である『甲府日記写生帳』にも記されている。その筆跡は広重のものと異なり、錦絵のものと同じであるので、後から加えたものであるのは間違いない。二人の仲がそれほどのものであったことになるが、さらに、錦絵の狂歌賛のほとんどは八陣亭の筆跡をそのまま刻したものでよい。

蛇足ながら、出品作の天保9年の摺物「雪の門松に犬」は、炮洲總連、すなわち、鉄砲洲に住む狂歌師が中心のグループによるものであるが、であれば、八陣亭も鉄砲洲辺に住まっていたのかもしれない。そうすると、弘化から嘉永期に、広重が毎年制作していた祭礼の灯籠絵(「鉄砲洲灯籠略図」が太田記念美術館に所蔵されている)にも関与していた可能性があるという想像が膨らむ。(浅野秀剛)



摺物「雪の門松に犬」図